

# 近代モンゴル語辞典の成立過程

## — 清文鑑から『蒙漢字典』へ

栗林 均\*

The Development of Modern Mongolian Dictionaries  
— From the 18<sup>th</sup> Century to the 20<sup>th</sup> Century

KURIBAYASHI Hitoshi

### 要旨

18世紀の中国清朝の時代には「清文鑑」と呼ばれる大部の満洲語辞典が相次いで編纂・出版された。それらは、対象とする言語の数と種類も、収録語数も、また語釈や発音情報の有無、表記方法も異なるが、いずれも皇帝の勅を受けて編纂されたものであること、収録語彙が意味によって分類・配列された分類辞典であること、そして満洲語を基盤としているという点で共通している。それらの清文鑑の中で、「対訳辞典」として近代モンゴル語の辞書の成立に最も大きな影響を与えたのは、『御製四体清文鑑』である。『御製四体清文鑑』は、出版された清文鑑の中では最後に位置し、最大の規模を有する。そこに収録されているモンゴル語が質・量ともに類のない大規模な辞典であったことに加えて、1項目を1行に配した体裁がその後のモンゴル語辞典の編纂に対して大きな便宜と影響を与えた。

モンゴル語の字母順配列辞典としては、1851年に賽尚阿によって編纂されたモンゴル語・漢語・満洲語の3言語対訳辞典『蒙文彙書』（別名『蒙文倒綱』）が写本として通行し、後に改訂を経て『欽定蒙文彙書』として1891年に刊行された。これと同年の序を持つ私撰の『蒙文総彙』と題するモンゴル語・漢語・満洲語の対照辞典が、ともに「出版された」最初の字母順モンゴル語辞典とみなすことができる。『蒙文総彙』は、1913年に『蒙漢滿文三合』として石版印刷で再版された。民国の時代になって『蒙古大辞典』（1912）、『蒙文分類辞典』（1926）、『蒙漢字典』（1928）等の辞典が出版されたが、これらは「清文鑑」の伝統を受け継ぎながら、満洲語を捨てることによって成立したものである。

キーワード：モンゴル語、清文鑑、対訳辞典、満洲語、漢語

Keywords: Written Mongolian, Qingwenjian, dictionary, Manchu, Chinese

### 目次

1. はじめに
2. 『四体清文鑑』の位置づけ
3. 『三合便覧』の位置づけ
4. 『蒙古托忒彙集』の位置づけ
5. 『蒙文彙書』および『欽定蒙文彙書』の位置づけ
6. 『蒙文総彙』（『蒙漢滿文三合』）の位置づけ
7. 『蒙古大辞典』
8. 『蒙文分類辞典』と『蒙漢字典』

---

\* 東北大学東北アジア研究センター

## 1. はじめに

今日、「清文鑑」と言えば『五体清文鑑』（『御製五体清文鑑』）を思い浮かべる人が多いであろう。『五体清文鑑』は、18世紀末の中国清朝で乾隆帝の勅命によって編纂された満洲語、モンゴル語、漢語、チベット語、ウイグル語の5言語対照辞典で、全36巻、約5,000頁からなる大冊である。1957年に、中国の民族出版社から『五体清文鑑』上・中・下の3巻本として影印刊行され、研究者のよく知るところとなった（注1）。

しかし、「清文鑑」というのは『五体清文鑑』だけでなく、18世紀の清朝の時代に相次いで編纂・出版された一連の満洲語辞典を指す名称である。それらは、対象とする言語の数と種類も、収録語数も、また語釈や発音情報の有無、さらに表記の体裁も異なる数種類の辞典が含まれる。

表1. は、主要な7種類の清文鑑を刊行の年代順に一覧にしたものである（注2）。

表1. 主要な御製清文鑑

刊行年	名称	言語	語釈	項目数	本文	総綱
1708年 (康熙47年)	「御製清文鑑」	満	有	12,110	20巻	4巻(4冊)
1717年 (康熙56年)	「御製満蒙清文鑑」	満・蒙	有	12,110	20巻	4巻(8冊)
1743年 (乾隆8年)	「御製満蒙清文鑑」 (満洲文字表記)	満・蒙	有	12,110	20巻	有(別本)
1771年 (乾隆36年)	『御製増訂清文鑑』	満・漢	有	18,654	正編32巻 補編4巻	正編8巻 補編2巻
1780年 (乾隆45年)	『御製満珠蒙古漢字 三合切音清文鑑』	満・蒙・漢	無	13,835	31巻	無
不詳	『御製四体清文鑑』	満・蒙・漢・ 蔵	無	18,667	正編32巻 補編4巻	無
不詳	『御製五体清文鑑』	満・蒙・漢・ 蔵・維	無	18,671	正編32巻 補編4巻	無

これらの清文鑑の中で、『五体清文鑑』は最後尾に位置し、最も多くの言語と、最も多くの語彙を収録した、いわば清文鑑の集大成とみなすことができる。このように、いわば「清文鑑」の代名詞にもなっている『五体清文鑑』であるが、その原本は18世紀末に手書きの写本として製作されたものの、他の清文鑑のように刻版印行されることはなかった。ただ、宮殿内に蔵されるのみで、長らくその存在すら世間に知られることはなかった（注3）。

本稿では18世紀の清朝の時代に編纂された清文鑑が、その後のモンゴル語辞典の編纂に与えた影響を検討するが、『五体清文鑑』に関しては、こうした事情から取り立てて述べるべきものは無い。

## 2. 『四体清文鑑』の位置づけ

近代のモンゴル語辞典の編纂に大きな影響を与えた清文鑑としては、語釈辞典では1717(康熙56)年序の「御製滿蒙清文鑑」であり、対訳辞典では『四体清文鑑』(『御製四体清文鑑』)を挙げるべきであろう。ここでは、対訳辞典の観点から『四体清文鑑』の特徴とその位置づけを検討する。

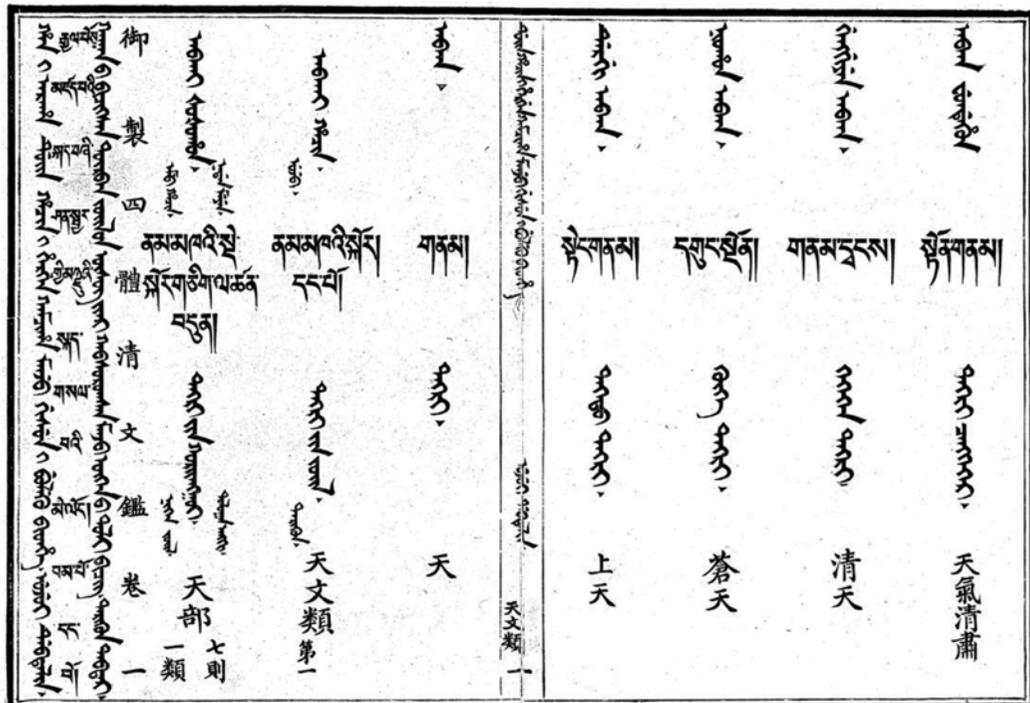
『五体清文鑑』は、上述のように満洲語、モンゴル語、漢語、チベット語およびウイグル語の5言語対訳辞典であるのに対して、『四体清文鑑』はそれらのうちウイグル語を除いた4言語の対訳辞典である。また、『五体清文鑑』では、チベット語とウイグル語に対して満洲文字で発音表記が付されているのに対して、『四体清文鑑』にはそれらが無く、訳語だけを並べた簡素な表記となっている。両清文鑑は、表記の体裁ではこうした違いがあるものの、全体の構成は同じである。つまり、両清文鑑とも、正編32巻、補編4巻から成り、いずれも項目の分類は正編で35部292類、補編で21類とし、そこに収録されている語彙(項目)に関してもほとんど異同は無い。語彙項目に関する両者の違いは、『五体清文鑑』では、『四体清文鑑』に収録されていない項目が4つあるに過ぎない(注4)。要するに、満洲語、モンゴル語、漢語の3言語に関しては、両清文鑑は基本的に同じものとみなすことができる。

『五体清文鑑』が写本として清朝内府に保管されて一般の耳目に触れることが無かったのに対し、『四体清文鑑』は刻版印行されて世に知られ、清朝の18世紀末から1世紀半以上にわたって最新かつ最大の清文鑑とみなされてきた。

『四体清文鑑』は、その後編纂されるモンゴル語辞書に対して、次の2つの面で大きな影響を与えたと考えられる。第1は、そこに収録されている語彙項目の量と質に関係する。『四体清文鑑』は、満洲語、モンゴル語、漢語、およびチベット語の4言語を対照させて、18,667項目を収録している。これは、それ以前のいずれの清文鑑よりも多くの語彙を収録した辞典であった。特にモンゴル語についてみた場合、1717年序の「御製滿蒙清文鑑」(および、1743年序の「御製滿蒙文鑑(満洲文字表記)」)と比べて6,500項目以上多く、1780年序の『御製滿珠蒙古漢字三合切音清文鑑』と比べても4,800項目以上多い。清文鑑の伝統として、そこに収録されている語彙の種類は、官民の社会、制度、文化、衣食住の生活、自然、動植物、人間関係、人間の動作・性質・精神生活に至るまで、あらゆる分野を包括した百科全書的な性質のものであった。要するに、『四体清文鑑』には、日常の言語生活にとって十二分な量と質のモンゴル語の語彙が収録されており、しかもそれらにはすべて満洲語・漢語・チベット語の対訳があったことから、モンゴル語辞書の編纂にとってこの上ない材料が提供されていたとすることができる(注5)。

『四体清文鑑』がモンゴル語辞書の発展に与えた大きな影響の第2として指摘しておきたいことは、語彙項目を配列する体裁に関するものである。我々にとっては『五体清文鑑』によって見慣れた体裁であるが、『四体清文鑑』では「1項目1行」の形式が実現されている。『四体清文鑑』の各頁は4行からなる。各行は4段に分けられ、上から満洲語、チベット語、モンゴル語、漢語が置かれている(図1)。つまり最上段の満洲語を見出し語として、その下に訳語を配し、1行を1項目としている。対訳辞書の場合には、見出し語の下に訳語を置くことは多く行われるが、2言語の対訳辞典では、大きな余白が出ることを避けて、2項目、3項目を1行に配し、あるいは1つの項目が行をまたいで書かれていることも少なくない。清朝時代の満洲語辞典の中に、1項目1行の体裁を有するものは皆無ではないが(注6)、それ以前の清文鑑にはなかったものである。『四体清文鑑』で初めて採用された「1項目1行」の体裁は、その後のモンゴル語辞書に範例として継承されることになった。

図1. 『四体清文鑑』第1巻の第1丁表(左)と裏(右)



### 3. 『三合便覧』の位置づけ

『三合便覧 (満 : ilan hacin i gisun kamcibuha tuwara de ja obuha bithe, 蒙 : yurban jüil-ün üge qadamal üje-küi-dür kilbar bolya=γsan bičig)』は、1780年の富俊の序をもつ満洲語、漢語、モンゴル語の3言語対照辞典である。全12巻の木版印刷で、第1巻には「序」「十二字頭」「蒙文指要」「清文指要」が収められ、第2巻から第12巻までが辞書の本体となっている。辞書の各頁は「1項目1行」の体裁で8行が配されている。各行は4段に分けられ、最上段に満洲語(満洲文字)、第2段に漢語(漢字)、第3段にモンゴル語(モンゴル文字)、そして第4段(最下段)には満洲文字によるモンゴル語の読音が記されている(図2)。

表1. にみた一連の清文鑑は、すべて満洲語の単語を意味によって分類・配列した分類辞典であるが、『三合便覧』の満洲語の見出し語は字母(十二字頭)順に配列されている。満洲語の字母順配列辞書としては、つとに康熙22(1683)年の序をもつ『大清全書』が知られるが(注7)、『三合便覧』は満洲語の字母順配列辞典の中で、はじめてモンゴル語の訳語を収録している。

『三合便覧』と『四体清文鑑』の緊密な関係は、今西[1966: 151-154]によって明らかにされている。両者の最大の共通点は、満洲語、モンゴル語、漢語の3種の語彙にほとんど差異が無いことである。これに加えて、両者の全体の構成が共通であることは注目に値する。つまり、『四体清文鑑』全36巻は、正編32巻、補編4巻から成っているが、『三合便覧』は第2巻から第10巻までが『四体清文鑑』の正編に相当し、第11巻と第12巻が補編に相当する部分であり、それぞれが独立した字母順の配列となっている。

図2. 『三合便覧』(1780) 第2巻の第1丁表(左)と裏(右)

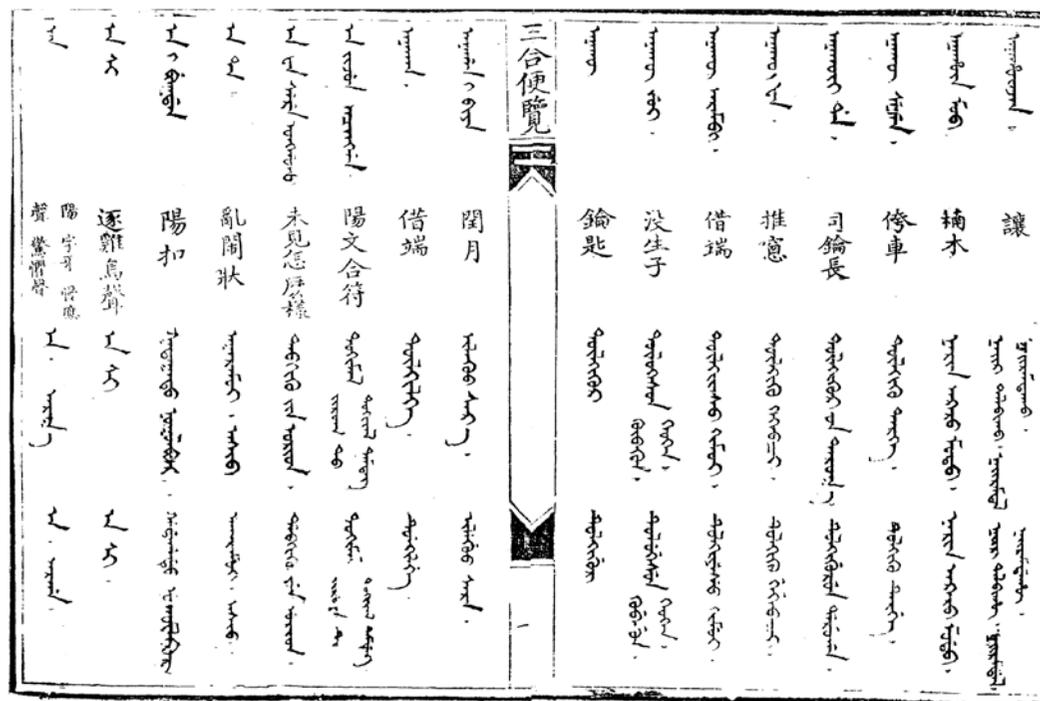


図2. は『三合便覧』の第2巻の第1丁表(左)と裏(右)の影印で、辞書の最初の部分にあたる。一番最初の項目(第1丁表の左端)では、満洲語の見出し語「a」に対する漢語とモンゴル語の訳語が付されている。『四体清文鑑』では、満洲語の見出し語「a」は、次のように4箇所に現れる(『五体清文鑑』も同様)：

『四体清文鑑』の出現位置	満洲語	漢語	モンゴル語
第2巻 時令部時令類 1	a	陽	ary_a
第7巻 文學部書類 8	a	字牙	a
第12巻 人部3 問答類 2	a	慢應聲	a
第14巻 人部5 聲響類 1	a	驚懼聲	a

『三合便覧』では、これらを満洲語「a」の見出し語の下にまとめている。

満洲語	漢語	モンゴル語
a	陽 字牙 慢應聲 驚懼聲	a ary_a

これに続く第1丁表の項目は、『四体清文鑑』の次の項目と対応している：

『四体清文鑑』の出現位置	満洲語	漢語	モンゴル語
2. 第14巻 人部5 聲響類 1	a si	逐雞鳥聲	a si
3. 第7巻 文學部文學什物類 1	a i bukdan	陽扣	γadayadu nuγulburi
4. 第5巻 政部争闘類 1	a ta	亂鬧狀	ayara=mui

5. 第 18 卷 人部 9 散語類 1	a fa sere onggolo	未見怎麼樣	dabki=kü-yin urid
6. 第 3 卷 論旨部論旨類	a jijun i acangga	陽文合符	togimal jiruy,tu tokiyal temdeg
7. 第 17 卷 人部 8 懶惰類	anagan	借端	tülkilge
8. 第 2 卷 時令部時令類 5	anagan i biya	閏月	ilegüü sar_a

これらを図 2. と比べれば、『四体清文鑑』の項目がほとんどそのままの形で『三合便覧』に収録されていることを確認することができる。このように、『三合便覧』は『四体清文鑑』に基づき、満洲語、モンゴル語、漢語を抽出して、それらの項目を満洲語の字母順に配列し、さらにモンゴル語に満洲文字表記発音を付加することによって成立している。ちなみに、最下段に付されている満洲文字によるモンゴル語の発音表記は、先行する『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』（1780 年序）の満洲文字表記モンゴル語によっているとみなすことができる。ただし、『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』に収録されていない項目（4,800 以上）に関しては、同じ方式で新たに付け加えたもので、この部分は『三合便覧』に独自の情報である。

『三合便覧』は辞書の体裁の面でも『四体清文鑑』に範を取って「1 項目 1 行」を実現している。意味によって分類・配列された大量の語彙を字母順に並べ替える際に、「1 項目 1 行」の体裁が作業の効率を大いに高めたであろうことは想像に難くない。ひとつの項目が行の途中で切れたり、行をまたがったりすることが無いため、項目ごとに縦に 1 行ずつ切り離し、それらを字母順に並べ替えて台紙に貼り付ければいからである。実際の作業で切り貼りしたか、書き写したかは、想像による外ないが、いずれにしても『三合便覧』は『四体清文鑑』の「1 項目 1 行」の体裁を最大限に生かして編纂された辞書であると言えることができる。

『三合便覧』に収録されている項目の数は、16,345 である。これは、『四体清文鑑』の項目数 18,667 よりかなり少ないが、見出し語「a」で見たように、『四体清文鑑』では別の部類に掲載されている見出し語を一つにまとめたためである（注 8）。

#### 4. 『蒙古托忒彙集』の位置づけ

『三合便覧』は、『四体清文鑑』に基づいて、満洲語の見出し語を字母順に配列した満洲語と漢語・モンゴル語の対訳辞典であるが、同じ様にモンゴル語を見出し語として字母順に配列すればモンゴル語と満洲語・漢語の対訳辞典を作ることができる。『三合便覧』の編者である富俊は、それをさらに発展させてオイラート文語（トド文字）を含めた『蒙古托忒（トド）彙集』として実現した。

『蒙古托忒彙集（蒙：mongγul tod üsüg-iyer neyileldügül-ü=gsen čuyalalγ\_a, 満：monggo tot hergen i acamjaha isabun）』は、嘉慶丁巳（1797 年）の富俊の序をもつ手書き写本 8 冊からなる多言語対訳辞典で、現在故宮博物院図書館に蔵される孤本である（注 9）。同書には、第 1 巻巻頭の序に続き、トド文字の字母表、オイラート文語テキストが置かれている（注 10）。辞書の本文は各頁に 8 行を配して「1 項目 1 行」とし、1 行を 5 段に分けて 5 種類の単語を並べている。最上段の見出し語は字母（十二字頭）順に配列されたモンゴル文語形（モンゴル文字）であり、以下順にモンゴル語口語形（満洲文字）、オイラート文語形（トド文字）、満洲語（満洲文字）、漢語（漢字）の 5 種類の単語を対照させている（図 3）。

モンゴル語の十二字頭では、母音字は a e i o u ö/ü の 6 種類を区別している。つまり、円唇母音は男性語では o と u の 2 種類を区別するが、女性語では ö と ü を区別せずに配列している。

図3. 『蒙古托忒彙集』(1797) 第1巻、辞書の第1丁表(左)と裏(右)

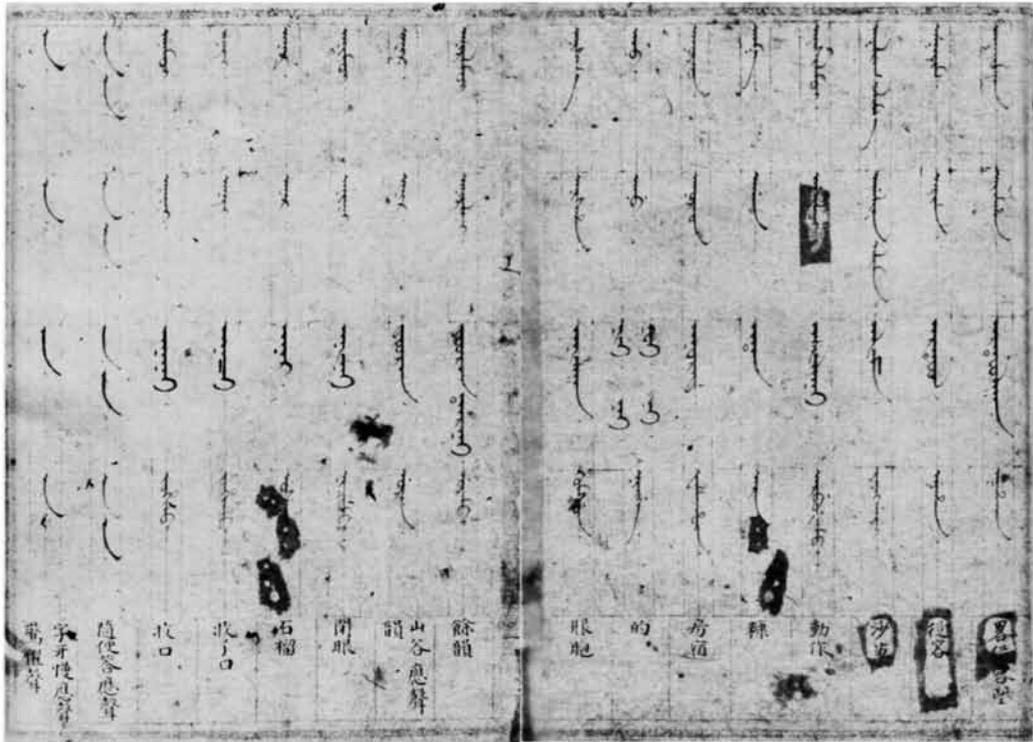


図3. の第1丁表(左)の第1行(左端)のモンゴル文語(第1段)、満洲語(第4段)、漢語(第5段)は、次のように書かれている。

モンゴル語	満洲語	漢語
a	a	字牙 慢應聲 驚懼聲

これは、『四体清文鑑』の中で満洲語の見出し語「a」をもつ4項目のうち、モンゴル語で「a」の訳語をもつ3項目をまとめたものである。さらに、第1丁表(左)のこれに続く項目が『四体清文鑑』の中でどのように現れるかを見ると、次の通りである。

『四体清文鑑』の出現位置	満洲語	漢語	モンゴル語
2. 第12巻 人部3問答類2	a a	隨便答應聲	a a
3. 第16巻 人部7瘡膿類2	johimbi	收口	ana=mui
4. 第16巻 人部7瘡膿類2	johihabi	收了口	ana=ji
5. 第28巻 雜果部果品類1	useri	石榴	anar
6. 第15巻 人部6睡卧類1	nicumbi	閉眼	ani=mui
7. 第14巻 人部5聲響類1	uran	韻	anir
第14巻 人部5聲響類4	uran	山谷應聲	anir, dayuriyan
8. 第14巻 人部5聲響類1	urambi	餘韻	anir=la=mui

これらの項目を、モンゴル語を見出し語として並べれば、そのまま図3.の項目となる。要するに、『蒙古托忒彙集』の基本部分であるモンゴル語、満洲語、漢語は、『三合便覧』と同様に『四体清文鑑』に基づいており、それにモンゴル語の口語（満洲文字表記）とオイラート文語（トド文字表記）を付加することによってこの辞書は成立している。

『蒙古托忒彙集』は、おそらくモンゴル語を見出し語として字母順に配列したものとしては世界でも最も古い辞書として位置づけられるであろう。しかしながら、これは手書き写本として内府に蔵されて長らく世に知られることは無かったため、その後のモンゴル語辞書の編纂になんらかの影響を与えたとは認めがたい。

## 5. 『蒙文彙書』および『欽定蒙文彙書』の位置づけ

『蒙文彙書（蒙：mongyul üsüg-ün quriya-γsan bičig, 満：monggo hergen i isabuha bithe）』は、賽尚阿（sayišangy\_a）による咸豊元（1851）年の序をもつモンゴル語、漢語、満洲語の3言語対照辞典である。全16巻から成る写本で、第1巻の巻頭の序に続き、辞書の本体は各頁に8行が配されている。『四体清文鑑』、『三合便覧』、『蒙古托忒彙集』と同様、「1項目1行」の体裁を取り、モンゴル語の見出し語は字母順に配列されている。各行は3段から成り、上から順にモンゴル語、漢語、満洲語が対訳の形で並べられている。『蒙文彙書』は現存の数本の写本の存在が知られており（注11）、清朝時代に通行した最初のモンゴル語の字母順配列辞典と見なすことができる。『蒙文彙書』は私家版の書写本のみが知られ、刻版印行されたという情報は無いが、賽尚阿の没後、光緒17（1891）年に『欽定蒙文彙書』として改訂版が木版印刷で刊行された（後述）。

『蒙文彙書』には、「蒙文倒綱」という題簽が付されている一本がある（筆者蔵）（図4）。この第1巻冒頭には、賽尚阿による咸豊元年（1851）の序が置かれ、そこには「蒙文彙書」という題名が書かれている。また、次のような書目の書誌情報や影印からも、これが『蒙文彙書』と同じものであることが知られる。たとえば、盧秀麗・閻向東編著〔2002：192-193〕には、『蒙文彙書十六巻』として同書の最初の頁の影印が掲載されているが『蒙文倒綱』の最初の頁（図5）はこれと同じである。また、春花〔2008：332-336〕には、この辞書に関する比較的詳しい解題があり、『蒙文倒綱』はその内容に合致していることを確認することができる。

『蒙文倒綱』という題名は、この辞書の成り立ちを表していると考えられる。「綱」は、清文鑑の「総綱」すなわち、巻末に収録されている満洲語の索引を指している。この「総綱」は、満洲語を字母順に並べた索引であることから、それを見出し語として、モンゴル語や漢語の訳語を付せば字母順配列の満洲語辞典ができあがる。（モンゴル語や漢語の訳語は、すでに『四体清文鑑』できあがっている。）「倒綱」の「倒」は、満洲語の下に置かれていたモンゴル語をひっくり返して（上にして）見出し語とした意味であろう。「モンゴル語を見出し語にして字母順に配列した索引式の辞書」がすなわち「蒙文倒綱」である。以下、本論では『蒙文彙書』と『蒙文倒綱』を同じものとして扱う。

『蒙文彙書』（『蒙文倒綱』）の編者である賽尚阿は序文の中で、「四體鑑（dörben jüil-ün üsüg-ün toli bičig）」と「滿蒙解語鑑（manju mongyul üsüg-i tayil=u-γsan toli）」を閲読して、モンゴル語を字母順に配列し、『清文彙書』の様式に倣って『蒙文彙書』を編成した、と書いている。そこに挙げられている「滿蒙解語鑑」は満洲語とモンゴル語の対訳辞書で、康熙56（1717）年の序をもつ「御製滿蒙清文鑑」あるいは、乾隆8（1743）年の序をもつ「御製滿蒙清文鑑（満洲文字表記）」を指すものと考えられる。それらの清文鑑は全く同じ内容で、後者は前者のモンゴル語（モンゴル文字）をすべて満洲文字に置き換えたものである。見出し語の語句が満洲語とモン

ゴル語で解釈・解説されていることから、『蒙文彙書』（『蒙文倒綱』）の編纂に際してはモンゴル語の語義の参照と確認に使われたものであろう。序文に挙げられているもう一方の「四體鑑」は、『四体清文鑑』を指すと考えられる（注12）。

『蒙文彙書』の編者の賽尚阿は、『蒙文晰義』『蒙文法程』『便覧補遺』の編者としても知られる。『蒙文晰義』2巻は、満洲語の多義語を見出し語にして、それに対応する漢語とモンゴル語の対訳を付したものである。『蒙文法程』は、満洲語の動詞の活用形や、接尾辞、助詞との結びつきの例をモンゴル語との対訳で示したものである。『便覧補遺』は、『三合便覧』の誤記を正した『便覧正訛（便覧訛字）』と、『三合便覧』に載録されていない語句や訳語を集めた『便覧補彙（便覧遺字）』から成る（注13）。『三合便覧』が『四体清文鑑』に基づいていることはすでに見たとおりである。その『三合便覧』の誤記を逐一正し、不足を補った賽尚阿の立場からすれば、『蒙文彙書』の編纂に際して『三合便覧』を直接の典拠として挙げる必要は感じなかったのかも知れない。賽尚阿は、『三合便覧』および『四体清文鑑』を利用しながら、『蒙文晰義』で語義を分析した訳語を使い、『便覧補遺』で補訂した情報を含めて『蒙文彙書』を編纂したと考えられる。

『蒙文彙書』の項目数は、17,953を数える。これは、『三合便覧』の項目数（16,345）を1,600あまり上回る数字である。

『蒙文彙書』は賽尚阿の没後、理藩院の建議により『欽定蒙文彙書』として改訂を経て印刷・刊行された。『蒙文彙書』が全16巻であるのに対し、『欽定蒙文彙書』は、「原奏・官銜」1巻と本文16巻の全17巻からなり、原奏には「光緒17（1891）年」の日付が付されている。辞書本体の体裁は、『蒙文彙書』と同様に1頁に8行を配し、1行を3段に分けてモンゴル語、漢語、満洲語を対照させている（図6）。収録されている語彙も、図5.と図6.に見るように基本的には『蒙文彙書』と同じであるが、部分的に字句の追加・訂正、行変えなどの改訂が行われ、随所に「増補」の見出しのもとに項目が追加されている。『蒙文彙書』が「欽定」の名のもとに出版されて、ここに字母順配列モンゴル語辞典のひとつの規範が提供されることとなった。

図4. 『蒙文倒綱』第1巻序と第2巻以降

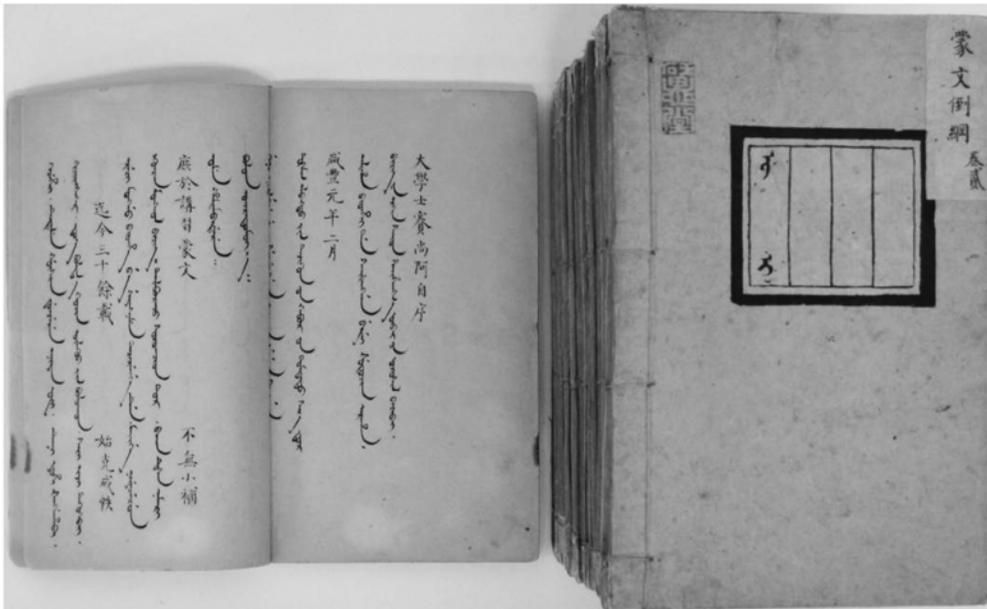


図5. 『蒙文彙書』（『蒙文倒綱』（1851）第1巻本文冒頭部分

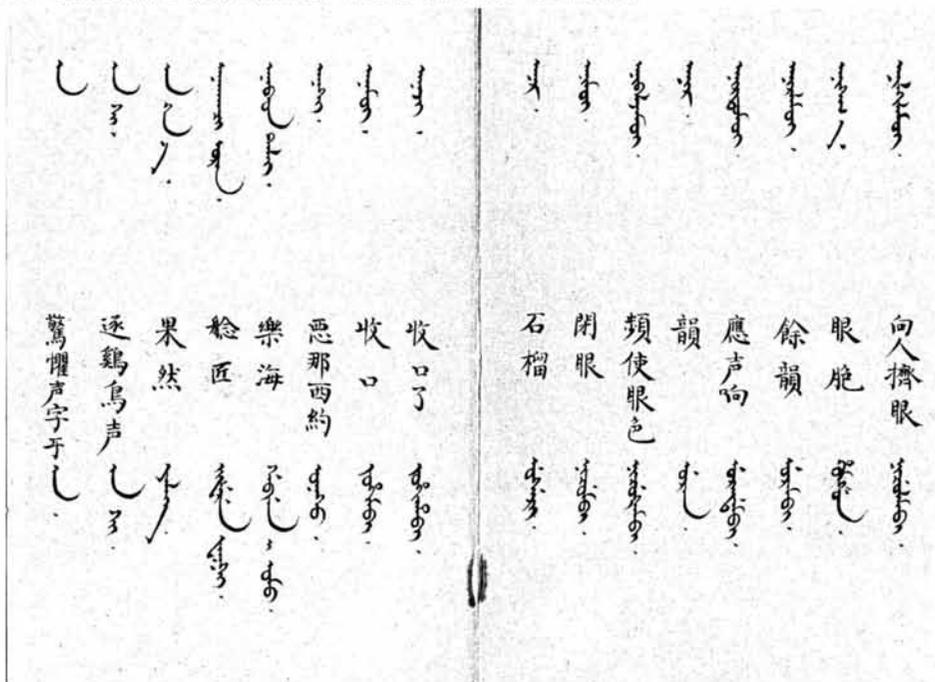
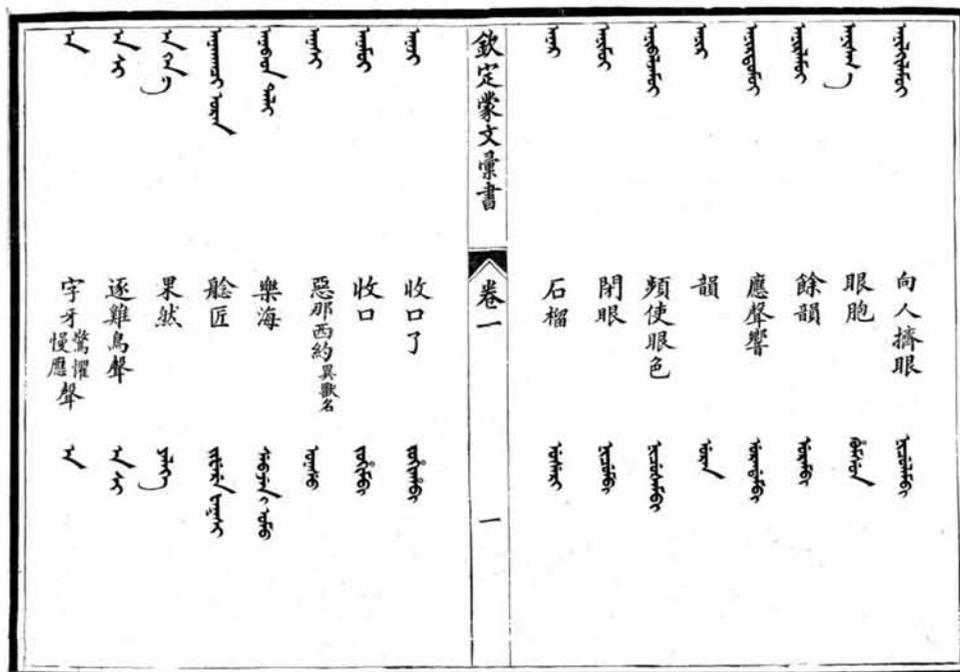


図6. 『欽定蒙文彙書』（1891）第1巻の第1丁表（左）と裏（右）



『蒙文彙書』および『欽定蒙文彙書』の第1丁の単語が、『四体清文鑑』のどこに載録されているかをみると、次の通りである：

第1丁表（左側）

『四体清文鑑』の出現位置	満洲語	漢語	モンゴル語
2. 第14巻 人部5 聲響類 1	a si	逐雞鳥聲	a si
3. 第18巻 人部9 散語類 6	yalake	果然	a ken_e
4. 第10巻 人部1 人類 3	jifere faksi	舵匠	anayayčī uran
5. (該当項目なし)			
6. 補編第4巻 異獸類 5	onasu	惡那西約	anasi
7. 第16巻 人部7 瘡膿類 2	johimbi	收口	ana=mui
8. 第16巻 人部7 瘡膿類 2	johihabi	收了口	ana=ji

第1丁裏（右側）

『四体清文鑑』の出現位置	満洲語	漢語	モンゴル語
1. 第28巻 雜果部果品類 1	useri	石榴	anar
2. 第15巻 人部6 睡卧類 1	nicumbi	閉眼	ani=mui
3. (該当項目なし)			
4. 第14巻 人部5 聲響類 1	uran	韻	anir
5. (該当項目なし)			
6. 第14巻 人部5 聲響類 1	urambi	餘韻	anir=la=mui
7. 第10巻 人部1 人身類 2	humsun	眼胞	anisq_a
8. (該当項目なし)			

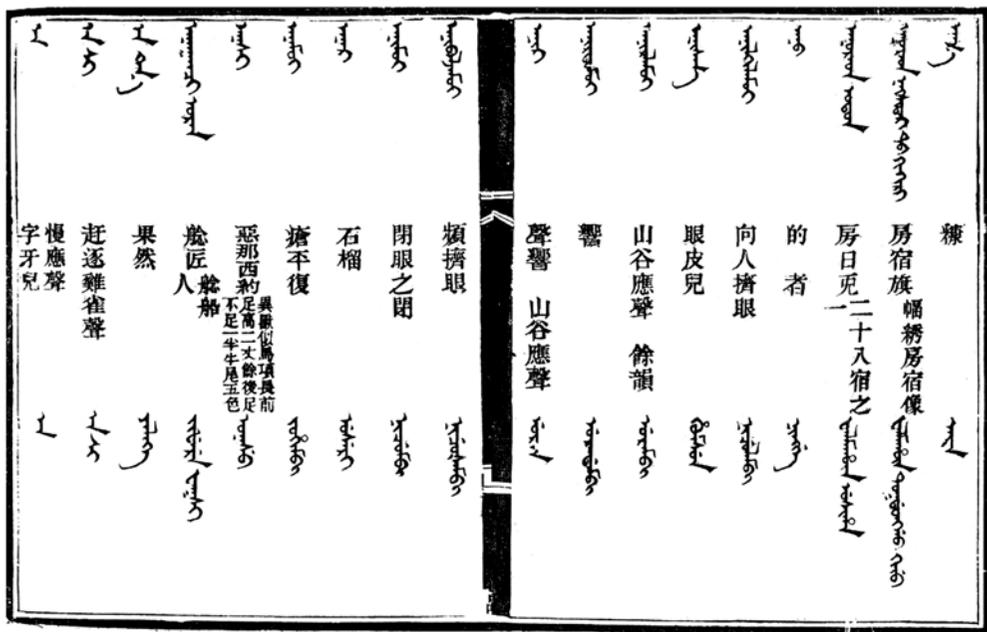
ここに見るように、第1丁表の1項目と第1丁裏の3項目は『四体清文鑑』の中にそのままでは見い出せない項目である。これらの項目の出典が何であるかは興味深い問題であるが、ここでは、『蒙文彙書』が『四体清文鑑』の語彙を一部補っていることだけ指摘しておく。

また、モンゴル語の見出し語が配列されている「十二字頭」では、母音字は a e i o/u ö/ü の5種類を区別している。つまり、円唇母音は男性語と女性語でそれぞれ1種類ずつで、その内部の違いは区別していない。また、子音字では、同じ字形をもつ t/d は配列順で区別されず、同様に同じ字形をもつ k/g も配列順で区別されていない。

## 6. 『蒙文総彙』（『蒙漢滿文三合』）の位置づけ

『欽定蒙文彙書』の公刊年と同じ年の光緒17(1891)年、『蒙文総彙(蒙:mongγul ügen-ü bügüde qurayγa=γsan bičig, 満:monggo gisun i uheri isabuha bithe)』と題する私撰のモンゴル語、漢語、満洲語の対照辞典が刊行された。木版印刷で全12冊からなる。同書の巻頭にはモンゴル語、満洲語、漢語を並べた昭甫裕彰の序文が置かれている。編者はグシラマ李鉉(字は品三)である。辞書の本文は図7.に見るように1頁は9行から成り、各行は3段に分けられ、上から順にモンゴル語、漢語、満洲語が置かれている(注14)。ここでも「1項目1行」の体裁が採用されており、見出し語のモンゴル語は字母(十二字頭)順に配列されている。十二字頭における母音字は男性の円唇母音字に2種類(o u)を区別して、a e i o u ö/üの6種類を区別している。また、子音字では、同じ字形をもつ t/d が配列の上で区別され、同様に同じ字形を持つ k/g も配列順で別の文字として区別されている。

図7. 『蒙文総彙』(1891) 第1巻の第1丁表(左)と裏(右)



全く同じ年に刊行された『欽定蒙文彙書』と『蒙文総彙』という2つの木版印刷のモンゴル語辞典は、その体裁も内容も極めて類似している。いずれも「1項目1行」の体裁で、1行を3段に分けて、上段にモンゴル語、中段に漢語、下段に満洲語を配し、見出し語(モンゴル語)を字母(十二字頭)順に並べている。収録されている語彙も、対応する漢語と満洲語の訳語も共通するものが多い。

『欽定蒙文彙書』と『蒙文総彙』の体裁と内容が類似しているのは、それらがいずれも先行する『蒙文彙書』に基づいて編纂されたことに起因している。『蒙文総彙』の序には、編纂にあたって利用・参照した書目は挙げられていないが、『蒙文彙書』を拠り所としたことは、収録されている語彙の共通性から明らかである。

図7. の『蒙文総彙』第1丁の語彙項目を図5. の『蒙文彙書』の本文第1丁と比較してみると、『蒙文彙書』にあって『蒙文総彙』に載録されていないのは、次の2項目だけある。

『蒙文彙書』の位置	モンゴル語	漢語	満洲語
1a-5	anabad dalai	樂海	sebjen i omo
1a-8	ana=ji	收口了	johihabi

『蒙文彙書』第1丁のこれ以外の項目はすべて『蒙文総彙』にも収録されているが、漢語の訳語が少なからず改変されていることは注目に値する。『蒙文彙書』の漢語訳が、『四体清文鑑』の漢語訳によっていることは、上に見たとおりである。『四体清文鑑』の漢語訳は、また乾隆36(1771)年序の『御製増訂清文鑑』をそのまま採用しているものが多いことから、それらは100年以上も前に、満洲語に付された漢語訳とみなすことができる。『蒙文総彙』の編纂に際しては、それらの訳語をより分かり易く、またモンゴル語の見出し語に合った訳語とするべく意を砕いたものと考えられる。

次は、『蒙文彙書』第1丁の漢語訳と『蒙文総彙』の漢語訳を対照したものである。

位置	モンゴル語	漢語	『蒙文総彙』の漢語訳
1a-1	a	驚懼声字牙	慢應聲 字牙兒
1a-2	a si	逐鷄鳥声	赶逐雞雀聲
1a-3	a ken_e	果然	= 果然
1a-4	anayayčī uran	艚匠	艚匠 <sup>船人</sup>
1a-5	anabad dalai	樂海	(項目ナシ)
1a-6	anasi	惡那西約	惡那西約 <sup>異獸似馬項長前足高二丈 餘後足不足一半半尾五色</sup>
1a-7	ana=mui	收口	瘡平復
1a-8	ana=ji	收口了	(項目ナシ)
1b-1	anar	石榴	= 石榴
1b-2	ani=mui	閉眼	閉眼之閉
1b-3	anibalja=mui	頻使眼色	頻擠眼
1b-4	anir	韻	聲響 山谷應聲
1b-5	anirtu=mui	應声响	響
1b-6	anirła=mui	餘韻	山谷應聲 餘韻
1b-7	anisq_a	眼胞	眼皮兒
1b-8	anilkila=mui	向人擠眼	= 向人擠眼

両者の漢語訳が全く同じものは「=」印を付した3語だけである。他はモンゴル語の訳語として表現を改め、或いは説明を加えて語義をより明らかにしようとしている。

ここで、『蒙文彙書』（『欽定蒙文彙書』）と『蒙文総彙』とを比較して、目立った特徴をまとめておきたい：第1に、収録項目の数は、『蒙文彙書』が17,953であるのに対し、『蒙文総彙』は16,381と、約1,570少ない。上の表でも、『蒙文総彙』では『蒙文彙書』のすべての項目をそのまま採用している訳でないことが分かる。編纂の際に選別を行ったものと考えられる。

第2に、『蒙文彙書』（『欽定蒙文彙書』）では母音字は a e i o/u ö/ü の5種類であるのに対し、『蒙文総彙』では母音字は a e i o u ö/ü の6種類を区別している。また、『蒙文彙書』（『欽定蒙文彙書』）では子音字で同じ字形をもつ t/d および k/g は同じ文字として扱われているのに対し、『蒙文総彙』では t と d を別の文字とし、k と g も別の文字として区別している。

第3に、モンゴル文字の表記に関して、『蒙文彙書』（『欽定蒙文彙書』）では、母音字の前に位置する子音字 <y> に一貫して点が付されず、子音字 <q> と同じ字形 (ᠶ ᠠ ᠨ) で書かれている。これに対して、『蒙文総彙』ではそれら (<y>) に点を付している。したがって、『蒙文彙書』および『欽定蒙文彙書』では、ᠶᠠᠨ の見出し語の下に、「糠」と「兄」という漢語の訳が付されているが、『蒙文総彙』では、ᠶᠠᠨ (ay\_a 「糠」、ᠶᠠᠨ (aq\_a 「兄」) のように点の有無で表記を区別し、別の文字としている。第2と第3の特徴は、見出し語の配列順序に関係している。

第4に、『蒙文彙書』（『欽定蒙文彙書』）では、漢語の訳語に『四体清文鑑』の訳語をそのまま使っている場合が多いが、『蒙文総彙』では漢語の訳語を改訂し、あるいは割注の形で語義の説明を加えたり別の語句を補っている箇所が多い。たとえば、図7.の左から4番目の項目の漢語訳

図8. 『蒙漢滿文三合』(1913) 第1冊表紙



「艚匠」の下に「艚船人」と割注を付し、5番目の単語にも中細字で3行の割注で語義の説明(「異獸似馬項長前足高二丈餘後足不足一半牛尾五色」)を加えている。

同じ光緒17(1891)年に刊行された『欽定蒙文彙書』と『蒙文総彙』は、ともに「清朝で最初に出版された字母順配列のモンゴル語辞書」の榮譽が与えられるべきであろう。「欽定」の文字を冠した『欽定蒙文彙書』は、大きな權威の裏づけをもっていたが、より広く世間に普及したのは『蒙文総彙』であった。

『蒙文総彙』は民国2(1913)年に北京の正蒙印書局から『蒙漢滿文三合』として石版印刷で再版されている(図8)。『蒙文総彙』の元の判型(19.4×25.8cm)がひと回り小さくなり(12.6×20cm)、各冊に図8.のような表紙を付けたほか、元の序文の後に新たにモンゴル語(2丁4頁)と漢語(1丁2頁)の序(内容は同じ)が加えられている。それ以外は、『蒙文総彙』と全く同じで、影印復刻本とみなすことができる。このように版を重ねたことから見れば、『蒙文総彙』は近代におけるモンゴル語辞典として大きな需要があったことが窺われる。

## 7. 『蒙古大辞典』

『蒙古大辞典』は、民国元(1912)年に北京の籌蒙學社から石版刷りで出版されたモンゴル語・漢語辞典である。縦15.8cm×横11cmの版型で、上下2冊からなる。奥付には編輯者として、應時、周日庠、葉森、楊維翰、葉紹先、萬綸、黃錕、趙常恂、龔鴻楷らの名が書かれている。上冊の巻頭には「例言」(凡例)4頁が置かれており、辞書の本体は1頁を9行とし、「1項目1行」の体裁を取っている。1行を3段に分け、最上段に見出し語として字母(十二字頭)順に配列したモンゴル語を置き、その下に漢語訳が、最下段には項目の通し番号が付されている(図9)。下冊の末尾には626頁の「漢文対照表」(漢語索引)があり、その部分は行が右から左に、頁も右から左に進む体裁となっている。つまり、「漢文対照表」(漢語索引)は下冊の最終頁から(辞書の反対側から)開く、合冊の形となっている。

同書の「例言」には、編纂の際に「蒙文彙書」「蒙文鑑」「三合便覧」「蒙文晰義」「四體合璧」等の諸書を参考にしたと書かれている。図9.の1-2頁の項目を図6.と対照すれば、それらは

『欽定蒙文彙書』のモンゴル語と漢語訳の部分と全く同じであることが分かる。また、この辞書では、母音字の前に位置する子音字 <y> に点が付されず、子音字 <q> と同じ字形 (ᠶ ᠢ ᠨ) で書かれているが、この点に関しても『欽定蒙文彙書』(および『蒙文彙書』)と同じである。さらに、十二字頭の母音字の表記に関しては a e i o/u ö/ü の5種類(円唇母音は男性母音字と女性母音字1種類ずつ)とし、子音字では同じ字形をもつ t/d および k/g はそれぞれ配列順で区別されていない。これらは、すべて『欽定蒙文彙書』と軌を一にした特徴であり、モンゴル語・漢語辞典の部分は『欽定蒙文彙書』に依っていることは明らかである。

『蒙古大辞典』のユニークな特徴は、その漢語索引にあると言えよう。図10は、同辞典の「漢文対照表」の第1頁と第2頁である。「対照表」は、「實字部」「虚字部」「成語部」に分かれ、さらに「實字部」は「名辞」「組合名詞」「指示詞」「形容詞」「動詞」「形容動詞」「代名詞」に分類され、それらがさらに意味によって下位分類されている。

特徴的なのは、その検索方法である。「対照表」の一番最初にある語は、「天 ᠠᠮ 1277」とある。これは、漢語訳「天」をもつモンゴル語は「ᠠᠮ (te/de) の1277番」にあるという意味である。この1277という数字は、先に見た辞書の最下段の通し番号に他ならない。同様に「上天 ᠠᠮᠤ 644」とあるのは、漢語訳「上天」に対応するモンゴル語は「ᠠᠮᠤ (te/de) の644番」にあるという意味である。頁最下段の項目ごとの通し番号は、このように漢語索引の検索のために設けられているものである。

図9. 『蒙古大辞典』(1912) 第1-2頁

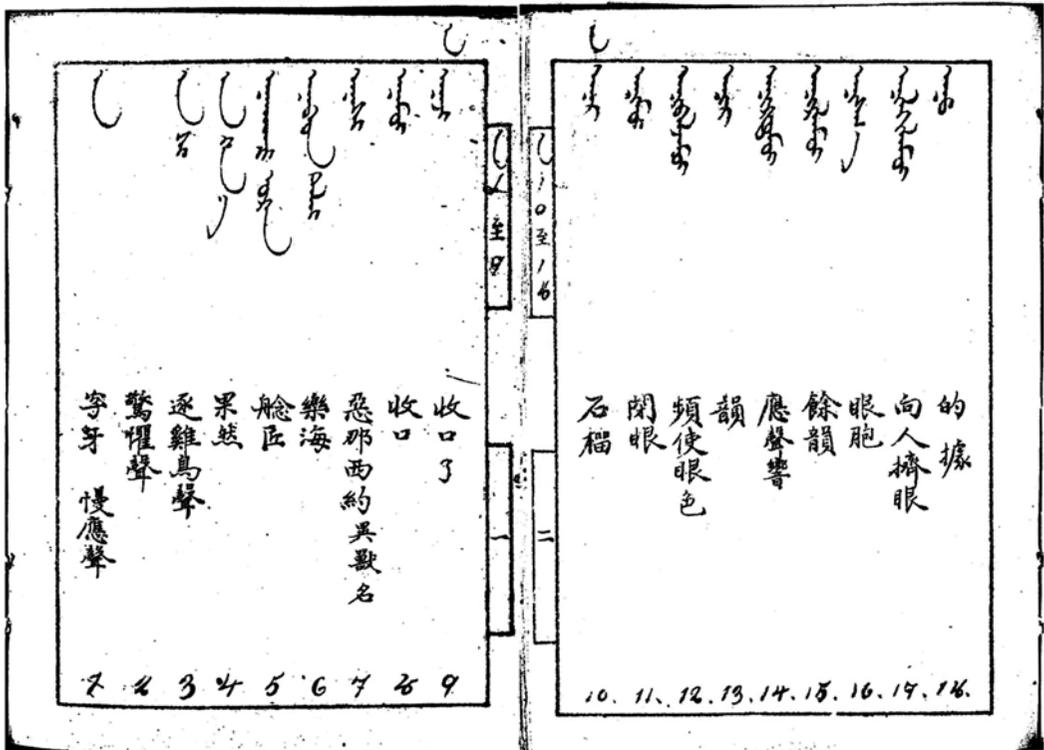






図 13. 『蒙漢字典』(1928) 本文第 1 丁表 (左) と裏 (右)

蒙 漢 字 典  阿 字 頭  蒙 漢 字 典	收口了 收口 惡那西約 異體名 樂海 船匠 果然 逐雞鳥聲 驚懼聲 字牙 慢應聲	阿字頭 的者 向人擠眼 眼抱 應聲響 餘韻 韻 類使眼色 閉眼 石榴	收口了 收口 惡那西約 異體名 樂海 船匠 果然 逐雞鳥聲 驚懼聲 字牙 慢應聲	習俗 習性 風氣 動作 奶底子 敬長 長 使居長 居長 老絃 長女 長子 年長之長長子 兄長自居 使爲兄長	留 在 游絲 蜘蛛 蕎麥麪 懸空處 手拍疼愛 亂鬧狀 略從容些 從容 糠難 糠 沙果	山鶴鷓 山鶴 山柳 走山 高山冠 東方明 山嶺 山 羅子頭船 自如弘虛心 苛求 究原 留住	
	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿
	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿	兄禮相待 長長 敬長 長長 長長 長兼 長上 衆兄 兄長 房宿

項目を中心部分は『四体清文鑑』に他ならない。『蒙古大辞典』も含めて、これらのモンゴル語辞書は、満洲語の辞典である「清文鑑」に由来していながら、満洲語を削除することによって成立している。このことは、「清文鑑」の終焉を象徴的に示しているとみなすことができるが、そこに体現されているのは紛れも無い「清文鑑」の伝統である。

## 注

本稿は、2011年2月12・13両日に東北大学東北アジア研究センターで開催された「国際ワークショップ モンゴル語の辞書」における研究発表をもとに加筆補正したものである。

(1) 1998年に再刊された。

(2) 黄 [1957(1998)]、今西 [1966] 等をもとに作成した。「項目数」は筆者の調査による。

「刊行年」はそれぞれの序に記されている年号。「名称」は漢語題名を『』に入れ、漢語題名の無いものは「」に入れた。「言語」の略語は：「満」＝満洲語、「蒙」＝モンゴル語、「漢」＝漢語、「藏」＝チベット語、「維」＝ウイグル語（アラビア文字で書かれたチュルク系の言語）。「総綱」は、本文の見出し語を字母順に配列して出現位置を示した総索引のことである。

(3) 『五体清文鑑』の存在を最初に学界に報告したのは、羽田 [1913] である。内藤湖南、羽田亨両博士は奉天故宮に蔵されていた一本を撮影した写真版を京都大学に将来し、1937年にその影印複製本（7函36冊の線装本）が東洋文庫から公刊された。

現在、『五体清文鑑』には3種類の書写本があることが知られている。そのうちの2本は北京故宮博物院にあり、1本は大英図書館に蔵されている。今西 [1966: 160-161]、栗林 [2008b: 8-12] を参照。

(4) それらの4語の満洲語と漢語訳を示せば次の通りである。

第9巻武功部2敗獵類3の fenfuliyer tuheke 「獸中傷口著地倒狀」

第16巻人部7疼痛類2の holhon gocimbumbi 「腿肚轉筋」

第22巻産業部打牲器用類3の horhotu 「打虎豹大木籠」

第31巻獸部獸類3の šolonggo mafuta 「二歲鹿」

これについては、栗林 [2008a: 27]、栗林 [2008b: 12] を参照。

(5) 『四体清文鑑』の市般本と言われるものに北京嵩祝寺で刊行された『四体合璧文鑑』がある。『四体清文鑑』の正編32巻に当たる部分を圧縮して配列したもので、一般に広く用いられた。今西 [1966: 149-151] を参照。

(6) たとえば『欽定清語』がある。『欽定清語』については、春花 [2008: 154-155] を参照。

(7) 『大清全書』については、春花 [2008: 293-297] を参照。

(8) 項目数は、筆者の算定による。春花 [2008: 310] では、『三合便覧』の収録条目を20,144としているが、これは第2巻から第12巻までの丁数(1,259)に1丁の行数(16)を単純に掛け合わせた数字であり、正確ではない。同書に示されている他の辞典の収録語彙数も、このような単純な計算によっている。

(9) 『蒙古托忒彙集』については、李徳啓 [1933: 29]、黄潤華・屈六生 [1991: 102] などの書目でその存在が知られていたが、より詳しい文献学的情報は、春花 [2006]、春花 [2008: 314-317] で知ることができる。なお、原本は故宮博物院図書館に蔵されているが、その青焼写真複製本が中国国家図書館と北京大学図書館に所蔵されている。

(10) 同書に収められているオイラート文語(トド文字)のテキストは、満洲語学習書「一百条(tanggū meyen)」の中の7話の翻訳である。これについては栗林・斯欽巴図 [2009a, 2009b, 2010] を参照されたい。

(11) 『中国蒙古古文古籍总目』[1999]によれば、中国の国家図書館、遼寧省図書館、内蒙古自治区図書館、北京大学図書館、上海師範大学図書館等に所蔵されている。

(12) 「四體鑑」という名称からは、『四体清文鑑』だけでなく『四体合璧文鑑』(注5を参照)の可能性も考えられるが、『蒙文彙書』(『蒙文倒綱』)には『四体合璧文鑑』に収録されていない『四体清文鑑』の補編の語彙が収録されていることから、『四体清文鑑』を使用したことは明らかである。

(13) 『蒙文晰義』と『便覽補遺』には、それぞれ道光28(1848)年の序が付されている。『蒙文晰義』、『蒙文法程』、『便覽補遺』の4冊を1函にまとめて「蒙文晰義」もしくは「蒙文指要」という題が付されることがある。

(14) 栗林 [2010] は、『蒙文総彙』の全項目(モンゴル語、漢語、満洲語)をモンゴル語のローマ字転写のアルファベット順に配列したものである。同書の「前書き」には、本論の内容に関連することがらが含まれている。

(15) 注(5)を参照。

(16) 注(4)を参照。

## 引用文献

### [日本語]

今西春秋

1966 「清文鑑 — 単体から5体まで」朝鮮学会『朝鮮学報』第39-40輯、121-163+11-1頁。

栗林均

2008a 「モンゴル語資料としての『清文鑑』」東北大学東北アジア研究センター『東北アジア研究』第12号、1-34頁。

栗林均

2008b 「多言語分類辞典『御製五体清文鑑』の利用に関する覚書」島根県立大学北東アジア地域研究センター『北東アジア研究 別冊：北・中央ユーラシアにおける異文化の波及と相互接触による文化変容の歴史的研究』7-25頁。

栗林均

2010 『『蒙文総彙』—モンゴル語ローマ字転写配列—』仙台：東北大学東北アジア研究センター。

栗林均・斯欽巴図

2009a 「『初学指南』と『三合語録』におけるモンゴル語の特徴—満洲文字表記モンゴル語会話学習書の口語的特徴—」『日本モンゴル学会紀要』第39号、1-13頁。

栗林均・斯欽巴図

2009b 「tangū meyen (一百条) のオイラート文語訳について」東北大学東北アジア研究センター『東北アジア研究』第13号、127-168頁。

栗林均・斯欽巴図

2010 「『トド文字一百条』と『三合語録』のモンゴル語の対応」東北大学東北アジア研究センター『東北アジア研究』第14号、189-225頁。

田村實造、今西春秋、佐藤長（共編）

1966 『五體清文鑑譯解（上・下巻）』京都：京都大學文學部内陸アジア研究所。

羽田亨

1913 「五体清文鑑」『芸文』4:8, 28-33頁。

### [中国語]

北京市民族古籍整理出版规划小组办公室满文编辑部编

2008 《北京地区满文图书总目》沈阳：辽宁民族出版社。

春花

2006 「论《蒙古托忒汇集》的语言学价值」《卫拉特研究》2006年第1期、62-70頁。

春花

2008 《清代满蒙文词典研究》（中国蒙古学文库）沈阳：辽宁民族出版社。

黄明信

1957(1998重印) 「有關五体清文鑑的一些历史材料」《五体清文鑑》（民族出版社）下冊末尾，1-7頁。

黄润华・屈六生编

1991 《全国满文图书资料联合目录》北京：书目文献出版社。



